



統計学が最強の学問である

西内啓著

ダイヤモンド社 2013

商学部教授 奥瀬 喜之

専修大学の学生の中には、自分は文系学部に入ったのだから、もう数学の勉強はしなくてもいい、と思ってホッとしている新入生は多いのではないか。そういった学生をがっかりさせるかもしれないが、文系学部であつても数学を使うことはあり、悪戦苦闘する学生もいる。厳密に言えば、多くの大学生が格闘することになるのは、数学ではなく統計学である。統計学は、経済学、経営学、商学分野で用いられるばかりか、社会学、心理学においても用いられる。法学部でも計量政治学と呼ばれる分野で用いられているし、文学部でも言語学などで統計学を用いることがある。多くの学生にとって、統計学は避けがたい関門なのである。

統計学を学ぶことで“無敵”になるとは言わない。本書のタイトルにあるように「最強の学問」であるとも思わない。しかしながら、統計学を学ぶことによって、

相手を納得させるための一つの方法論、いわば「道具」を手に入れることができることは事実である。多くの学生にとって、統計学は道具として極めて便利なものなのである。

本書は統計学の教科書ではない。しかしながら、手軽に読めて、統計学を学ぶことの意義、統計学を学ぶことによるメリットを嫌というほど教えてくれる本である。

統計学を専門とする学生は少なくとも、統計学を道具として使用する学生は少なくないはずだ。その道具で何ができるのか、その道具を使うメリットは何なのか、知っておいても損することはないであろう。

